

C'n

vol. 19

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



小田野直武《蓮図》神戸市立博物館蔵

江戸の異国趣味

- 南蘋風大流行 -

千葉市美術館所蔵作品展

実験工房の作家たち

長崎からの新しい風

江戸の異国趣味 - 南蘋風大流行 -

現代は、世界が大変に狭くなり、地球上のどこの国のことでも身近に感ずることができるようになりました。衛星放送で各国のテレビのニュース番組を毎日見ることができるようになるとは、少し前までは思ってもみないことでした。電子メールやインターネットで、世界中の人や機関と即時に交信可能にまでなっていました。にもかかわらず、というよりもだからというべきか、憎しみや敵意が増幅して、剣呑な国際情勢になってきたのは、困ったものです。

ところで今からほんの百数十年前までは、日本はほとんど鎖国状態になっていたものでした。江戸時代の実質的な国の政府である徳川幕府は、中国とオランダとのみに正式の通商を許し、朝鮮と琉球の2国から国王の使節を迎えるのみでした。きわめて内向的な国であったわけで、国際的なお付き合いを2世紀半もの長い間ことわり続けていたのでした。時代の終わり頃はともかくとして、外国からの脅威におびえることもなく、国内には平和な状態が保たれ、自国の文化をじっくりと育て、醗酵させることができたのでした。

国の外から物や人、そして情報が入ってくる窓口は、九州の西北にある港町長崎に限られていました。日本という国を一軒の閉ざされた家だとすれば、長崎は、外からの新鮮な空気を吸い込むことのできる、たった一つの換気口のようなものでした。中国やアジア、そしてヨーロッパの、珍しい事物や図書などとともに、学問や美術の新しい波が直接間接に長崎に伝えられ、日本の文化全般を刺激し、多大な影響を及ぼしたものでした。

刺激とその影響という関係には不思議な傾向があります。たとえ量的に少なく、かすかな刺激であったとしても、受ける方の側に十分な用意があるときは敏感に反応するのが普通です。たとえば歯医者さんの椅子で治療を受けている時、痛みがいつくるかと待っていると、いざその時には小さな痛みも大きく感じられてしまうことがあるでしょう。それと同じで、受け取る側の期待や欲求が大きく強い時には、思いがけないほどに影響の波紋が広がることがあります。江戸時代の美術界にもそのような現象が典型的なカタチで起こったのでした。

享保16年（西暦1731年）12月3日に長崎に来日した中国人画家沈南蘋は、2年後の享保18年9月18日に帰国の途につくまでの

わずか2年足らずの間、当地の日本人画家熊斐（中国人風の画名で「ゆうひ」と読みます）らに写実的な画法を伝授しました。そして忠実な門人の熊斐は、黄檗宗の禅僧鶴亭（かくてい）や江戸からはるばるやってきた楠本雪溪（やはり気どって宋紫石と改名）に南蘋風の新しい写生画法を伝え、さらに鶴亭は京阪の上方へ、宋紫石は江戸へと、それぞれ長崎からの新しい風を運んでいきました。その結果、京都では与謝蕪村や伊藤若冲、

円山応挙、江戸では司馬江漢などの革新的な画家たちに、深刻な影響を与ることとなりました。静かな池に投げ込まれた小さな石が、池全体に波紋を広げていくように、沈南蘋の絵画世界が日本列島全体に行き渡っていったのでした。

文字通り一石を投げられた日本の絵画界は、当時どのような状態にあったかといえますと、元禄（1688 - 1704年）の頃までの活気が失われて、全体的に停滞期にありました。古い絵のお手本にしたがうばかりで、自然に存在する物の形を正確に写し取ろうとする絵の基本が忘れられがちになっていました。しかも、時代の精神は客観的な実証主義を尊重するようになり、合理的な科学への試みも芽生えはじめていました。目の前に在る草や木、花や鳥などを、目に見えるままに忠実に表そうとする沈南蘋の花鳥画風が、当時の日本人の求める方向と見事に一致していたのでした。沈南蘋の絵画は、彼が帰国後も大量に日本に送られてきました。長崎に輸入される中国絵画の主要な品目の一つに数え上げられたほどで、江戸時代の後半の長い期間、影響を残し続けたものでした。

当館の秋の特別展では、この沈南蘋の絵画の影響と創造的な受容の様相を、全国的な規模において展望しようとする特別展「江戸の異国趣味 南蘋風大流行」を企画しています。どうぞこの機会に、あの閉鎖的な時代にあってなお、あるいはそれだけになおさら、外からの文化的刺激に熱く反応した祖先たちの営みに想いをいたしていただけに幸いです。もはや外国に学ぶべきものは何もないなどと思いがった風潮が広がっているようで、少し

く気にかかります。異質の文化にも敏感に反応できるような、柔らかい心を常に用意しておきたいものと思われてなりません。

館長 小林 忠



熊斐《登龍門図》長崎市立博物館蔵

めでたい花と鳥

「江戸の異国趣味 - 南蘋風大流行 - 」展で飾っている絵のほとんどは花や鳥を描いた花鳥画です。虫、魚、獣の絵もありますが、花鳥・山水・人物の三大主要ジャンルのどこかへ入れるとすれば、虫も魚も獣も間違いなく花鳥の仲間でしょう。数少ない人物画も司馬江漢「西王母図」(千葉市美術館蔵)のように後ろに桃の枝があったり、小田野直武「唐太宗・花鳥山水図」(秋田県立近代美術館蔵、重要文化財)のように花鳥画とセットだったりします。

花鳥は花が咲き乱れ鳥が舞い遊ぶ楽園の象徴なので、花鳥画はそもそもめでたいものなのですが、その中でも特に具体的にめでたい意味が決まっている花や鳥の種類、その組み合わせがあります。例えば「松竹梅」。清酒の銘柄だったり料金コースの上中下を表していたりしますが、もともとは、冬の寒さに耐えて緑を保つ松・竹、花を咲かせる梅を三つまとめて「歳寒三友」と呼び、めでたいものとししたものです。そのようなめでたい組み合わせを吉祥図案と呼びます。日本で見られる吉祥図案の多くは中国に由来します。

展覧会場の作品解説でもなるべくひとつひとつの画題の意味を解説するように心がけていますが、ここではたびたび出てくる花木、鳥についてそのめでたい意味と図案をご紹介します。

《花木》

[1] 梅

梅はバラ科の落葉高木で中国原産。樹皮は黒褐色で堅く、春先、葉に先立って香り高い五弁の花をつけます。

吉祥図案においては、梅は眉と音を通じる (mei) ことから「斉眉」を意味することが多いようです。「斉眉」とは『後漢書 - 梁鴻伝』を出典とし、食膳を捧げるときその高さを眉と等しく (斉 = 等しいの意) する意味から、妻が夫によく仕え夫婦円満であることを示します。綬帯鳥と組み合わせると、夫婦円満長寿を表す「斉眉双寿」になります。諸葛監「白梅綬帯鳥図」(千葉市美術館、図1)はその一例です。梅と眉の音通は常に斉眉の意味になるわけではなく、そのまま眉の意味にとって、目前にあるという意味を示すこともあります。喜びを伝える鳥、喜鵲 (カササギ) と合わせて、喜びに眼を輝かすという意味の「喜上眉梢」になることもあります。

雪が梅にかかっているのは冬の寒さに耐えて花を咲かせることを表すのでし

ょう。「歳寒三友」は松竹梅の他、梅・竹・水仙、梅・竹・石になることもあります。梅・竹・水仙の組み合わせは「歳寒仙侶」ともいいます。梅・竹・蘭・菊は高潔な四君子として主に水墨画の画題です。梅は正月の花として新年を表すのにも用います。



図1 諸葛監《白梅綬帯鳥図》
千葉市美術館蔵

春を告げる花としての意味をとると、カササギとの組み合わせも「喜報春先」になります。

中国では「緑竹生筍、梅結紅宝」(筍は孫と音通)の聯を結婚式のときに貼ることから梅と竹の組み合わせは、夫婦を意味します。

[2] 桃

桃はバラ科の落葉小高木で中国原産。春、葉に先立ってピンクまたは白の五弁の花を咲かせますが、梅よりは葉が少し早く、花と同時に細長い葉の先が見えています。『西遊記』で孫悟空が盗み食った桃の実が女仙人西王母の桃で、三千年に一度花が咲いて実を結び、その実を食べたものは不老不死というものでした。桃の実が生命力を象徴しています。司馬江漢「西王母図」に桃の花と実が描かれています。西王母の誕生日は3月3日と伝えられ、桃の節句と西王母は結びついているのでしょうか。中国菓子に桃饅頭がありますが、中国との人の往来が盛んだった長崎では出産祝などに桃をかたどった饅頭を贈る習わしがあるそうです。桃 = 寿というわけです。『沈南蘋画図百幅』(長崎の通訳が中国人に沈南蘋画の画題の意味を尋ねて記したもの)には、「桃柳四燕図」という画題が載っています。桃と柳が春を躰やし、四燕は賜宴と音を通じるので、四羽の燕を描いて朝廷より酒宴を賜るという意味です。太湖石に桃、萱草、松柏を配した「嵩山百寿」、牡丹と桃の花を合わせて「長命富貴」の画題もあります。蠣崎波響「瀑布双鳩図」(田中實氏蔵)に描かれているのも桃でしょう。

丸くてコロコロした桃の蕾や梅の匂いによって、実物で桃と梅を区別するのは簡単ですが、絵では区別が難しいこともあります。他に薬用に用いられ医業を象徴する杏の花(杏林大学も杏 = 医業にちなんだ名称)、次に説明する海棠の花もバラ科の植物ですし、日本で好まれる桜もバラ科で、判断に困る場合があります。

[3] 海棠

海棠はバラ科の落葉低木。春、葉があるところに林檎によく似た紅色の花が咲きます。海棠は棠 (tang) が堂と同じ音であることから、富貴を表す牡丹とともに富貴に満ち溢れることを示す「満堂富貴」や、牡丹・玉蘭と合わせた「玉堂富貴」の図案があります。『沈南蘋画図百幅』には海棠を堂上 = 父母の意味とし、長寿を意味する白頭翁と合わせて、父母の長寿を意味する「堂上白頭図」が載っています。黒川亀玉「海棠白頭翁図」(千葉市美術館、図2)は沈南蘋の「堂上白頭図」に倣ったものです。海棠と綬帯鳥の組み合わせも同じように父母の長寿を意味するのでしょう。

[4] 牡丹

牡丹はボタン科ボタン属の落葉低木



図2 黒川亀玉《海棠白頭翁図》
千葉市美術館蔵



図3 錦木梅溪
《竹に小禽圖》
長崎県立美術館蔵

で中国原産。晩春から初夏にかけて赤・白・紫の華やかな花を咲かせます。その花の豪華さから富貴の象徴であり、海棠と合わせて「満堂富貴」や、海棠・玉蘭と合わせた「玉堂富貴」の図案があります。長春花である薔薇または白頭翁と合わせて「富貴長春」、桃の花と合わせて「長命富貴」もあります。雄鶏との組み合わせは「功名富貴」になります。雄鶏は公鶏ともいい、公は功に音が通じ、雄鶏が鳴く鳴と名の音が通じることから、名を挙げ富貴に恵まれるという意味にとります。白頭翁と合わせると「白頭富貴」となり夫婦共に白髪になるまで富貴に恵まれ長生きするという意味です。牡丹に綬帯鳥も同じように富貴と長寿を意味するものでしょう。牡丹に猫は、猫の黒眼を細く描いて、正午を表し、牡丹=富貴がまっさかりであることを表す「正午牡丹」です。正午は牡丹の花がもっとも美しく開く時間でもあり、また猫が毫と同音で、八十歳九十歳の老人を表す毫耄と結びつき、長寿の寓意もあります。牡丹・猫・蝶の組み合わせは蝶が耄と同音であることから「富貴毫耄」になります。

牡丹を花瓶に挿し林檎を側に置くと「富貴平安」になります。林檎は中国語で蘋果といい、蘋は平と音が似ていて、瓶と平は音が通じます。芙蓉の花と合わせると、芙蓉の芙が富と、蓉が榮と同音で「榮華芙蓉」になります。百花の王と称されることから最高位である一品官の意味にとり牡丹だけで「官居一品」としたり、三国一の美人に例えて「国色天香」としたりもします。

[5] 薔薇

薔薇はバラ科バラ属。ふだん見かけるのは西洋バラですが、中国日本の絵画に描かれるのはバラ科の常緑低木である庚申薔薇で、中国原産、春から秋にかけて主にピンク色の花をつけます。一年を通じて開花することから長春花、月季花の異名があり、一年中という意味になります。花瓶に庚申薔薇で、瓶が平と同音であることから「四季平安」の図案があります。「長春白頭」は長春花（庚申薔薇）、寿石、白頭翁の組み合わせで長寿を意味します。桃・靈芝・竹（祝と音が通じる）と合わせた「群芳祝寿」もあります。吉祥図案では描かれる対象が互いに意味を打ち消しあうということはないので、他の図案に庚申薔薇が付け加わっている場合もあります。「斉眉双寿」である諸葛監「白梅綬帯鳥図」（図1）にも描き添えられています。

[6] 蓮

千葉市の花でもある蓮はスイレン科の宿根草で水生植物。夏にピンク・白の大ぶりの花を咲かせます。仏法の高貴さをたとえる花として、中国から伝来して日本でも親しまれてきました。蓮は泥から出て清らかな花をつけることと廉と音通であるため、高位にありながら身辺清潔であるという「一品清廉」の図案になります。花と実が同時について「連」と音通で子供が次々生まれるという意味から、不思議な良縁を喜び子供の誕生を祈る「因何得耦」、貴と音が通じる桂花と組み合わせで引き続き貴子が生まれるという意味になる「蓮生貴子」、仲のいい夫婦の例え

である鴛鴦と合わせて夫婦むつまじく子孫繁栄の意味とした「鴛鴦貴子」といった図案もあります。

[7] 芙蓉

芙蓉はアオイ科フヨウ属の落葉低木で、夏から秋にかけてピンクまたは白の花を咲かせます。芙が富と、蓉が榮と同音であることから富み栄えるという意味があります。芙蓉の花だけ、または芙蓉と牡丹で「榮華富貴」になり、路と音が通じる鷺と組み合わせでひたすら栄えるという意味の「一路榮華」の図案になります。

[8] 菊

菊はキク科キク属の多年草。秋に咲くものが多く、中国では不老長生の靈草とされていました。薬効のある枸杞（クコ）の実と合わせて長寿延命を意味する「杞菊延年」、寿石・蝶・猫と組み合わせた「寿居毫耄」（猫が毫と同音、蝶が耄と同音、毫耄は八十歳九十歳の老人を表す）も長寿を意味します。菊は居と同音でもあります。菊に黄雀を合わせると「拳家歡樂」という一家を挙げて福に喜ぶという意味の図案ですが、菊は拳と同じ音で、黄と歡が近い音であることを用いたものです。

《鳥》

[1] 綬帯鳥

寿帯鳥とも。頭に冠状の羽毛があって尾の長い鳥のことをそう呼んでいます。対応する実在の鳥としてサンジャク（カラス科）があてられて、一般に体色が青色であるにもかかわらず、沈南蘋の影響のもと白い綬帯鳥が多く描かれたので、「謎の鳥」とされてきました。『図説日本鳥名由来辞典』ではカワリサンコウチヨウ（ヒタキ科カササギヒタキ亜科）を沈南蘋の絵に由来する白い綬帯鳥にあてています。サンコウチヨウ（ヒタキ科カササギヒタキ亜科）もサンジャクに似たやや小さい鳥ですので綬帯鳥と呼ばれているかもしれません。そう思って見てみると、たくさんの種類の鳥を描いた百鳥図には綬帯鳥と呼べる鳥が大小2種類いたりします。諸葛監「白梅綬帯鳥図」（図1）はカワリサンコウチヨウの可能性が高そうです。

綬帯鳥の綬は寿と同音で、印綬（中国における官印とそれを身につける紐）とも通じます。印綬を帯びるとは官位につくことです。綬帯鳥の帯は玉帯を意味し、帯は代と同じ音で万代に通じます。眉と通じる梅、祝と通じる竹と組み合わせ、夫婦の富貴長寿を祝う「斉眉祝寿」の図案になります。春の光を意味する山茶花と合わせて「春光長寿」、帯の音が代に通じるのをとって寿石・水仙と合わせて「代々寿仙」となります。

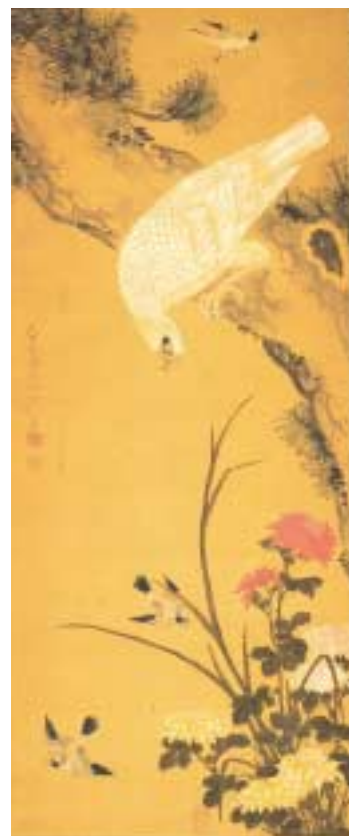


図4 伏山《花鳥図》 個人蔵

[2] 白頭翁

漢方の薬草にもありますが、ここでは鳥のことです。頭が白い鳥であり大きくないものをそう呼んでいるようです。主にシロガシラ（ヒヨドリ科）に対応しますが、江戸時代の鳥類図譜にはヒヨドリ・シジウカラを白頭公として描いた例や、ムクドリを白頭鳥としてとる例があります。頭が白いということは共通していても、画家によって大きさ、体つきなどさまざまな白頭翁が登場するのは、実物観察の不足のせいばかりではなく、複数種類の白頭翁がいるからでしょう。

頭が白いことを白髪の意味にとって長寿を表します。竊木梅溪「竹に小禽図」(長崎県立美術館、図3)は「長春白頭」という庚申薔薇(長春花)・寿石と組み合わせて長寿を意味する画題で、この画題は夫婦長寿の祝によく用いられます。白頭翁は長春鳥とも称し、牡丹に白頭翁を合わせて「富貴長春」になります。牡丹に白頭翁は夫婦共に白髪になるまで富貴に恵まれ長生きするという「白頭富貴」にもなります。「堂上白頭」は海棠を堂上=父母の意味とし、父母の長寿を意味します。黒川亀玉「海棠白頭翁図」(図2)は「堂上白頭」です。海棠の代わりに桐と組み合わせて「堂上双白」として夫婦の長寿を祝福するのに用います。鷹とそれを恐れる小鳥の画題は支配者の威光があまなく及ぶという意味の「威振八荒」ですが、その小鳥が佚山「花鳥図」(個人蔵、図4)では白頭翁になっています。

頭が黄色い鳥は黄頭鳥と呼ばれ、セリン・コシジロカナリア(アトリ科カナリア類)やキンパラの幼鳥と対応します。

[3] 鶴

ツル科の鳥の総称。古くからその端正な姿により神秘的な鳥とされてきました。湿原や草地に住み、実際には樹にとまることはなく、松に鶴の組み合わせは絵空事だそうです(松にとまるのはコウノトリの見まちがいでないかといわれています)。「鶴は千年、亀は万年」といい長寿の象徴です。吉祥の鳥であり、結婚式には鶴の模様が氾濫し、「白鶴」「若鶴」と清酒の銘柄にも多く用いられています。印刷した熨斗紙にも潜んでいたりします。

中国では鶴は鳥の中で第一の位とされ、一品鳥と称されました。「一品当朝」は一羽の鶴が波の打ち寄せる岩上に立つもので、朝と潮が音通であることから、一品の位に上り朝廷へ出仕するという意味になります。松に鶴は「松鶴長春」で主に夫婦の長春不老を祝う図案となります。岸駒「鶴図」(千葉市美術館、図5)は松に鶴を描いています。鹿もまた長寿の仙獣とされ、桐と合わせて夫婦の不老長久を表す「鶴鹿同春」の図案があります。仙人の乗り物として福祿寿・寿老人とともに描かれることもあります。

[4] 鷺

サギ科の鳥の総称。白鷺は白いものの代表です。姫路城を白くて優美な姿に例えて白鷺城といったりします。

吉祥図案では鷺と路の音が通じることにより、一羽の鷺を描いて一路、ひと筋にという意味とします。連と通じる蓮、根葉花が一本で揃い連科を表す芦(しかも路と音通)と合わせて「一路連科」とし、引き続き科挙に及第する意味となります。『沈南蘋画図百幅』には一羽の鷺で「一路功名」の題が載ります。

展示作品に頻出する花木、鳥についてそのめでたい意味と図案をご紹介します。ひとたび気づけば和風旅館で床の間にかかっている掛軸、中華料理店の装飾、着物の模様などおめでたい意味のある組み合わせがたくさんあります。鶴の意味



図5 岸駒《鶴図》 千葉市美術館蔵

は?と問われれば説明はできなくとも、結婚式や熨斗を連想して何となくおめでたい気がするものです。鶴はこのような理由でめでたいのである、と鶴をめでたいと理解しない文化環境の人に説明すれば、頭では「鶴はめでたいのだ」と理解するでしょうが、見ただけで何となくめでたい気がするという眼でわかる状態にはなかなかありません。ご紹介してきためでたい意味については現在の生活にかすかに生き残っているものもありますが、生活の中にある図像の意味と結びつけて展覧会をお楽しみいただければ幸いです。

学芸員 伊藤紫織

参考文献

- 野崎誠近『吉祥図案解題』(中国土産公司 1928)
 武田恒夫・辻雄雄編『花鳥画の世界第11巻 花鳥画資料集成』(学習研究社 1983)
 菅原浩・柿澤亮三『図説日本鳥名由来辞典』(柏書房 1993)
 成澤勝嗣『長崎派絵画の写実と吉祥』(特別展『江戸時代長崎派の花鳥画 花と鳥たちのパラダイス』図録、神戸市立博物館、1993)
 『四季花ごよみ』(講談社 1994)
 『特集中国イメージ・シンボル小事典』(『しにか』1996年5月号)
 特別展『吉祥・中国美術にこめられた意味』図録(東京国立博物館 1998)
 岡泰正『朝日選書646 身辺図像学入門 大黒からヴィーナスまで』(朝日新聞社 2000)

江戸の異国趣味 - 南蘋風大流行 -
 新世紀・市制施行80周年記念

平成13(2001)年10月30日(火) - 12月9日(日)
 10:00 - 18:00 平日の金曜日は - 20:00(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日
 【入場料】 一般 1,000(800)円
 大・高生 700(560)円
 中・小生 300(240)円 (内)は前売・団体30名以上
 【主催】 千葉市・千葉市美術館 【共催】 財団法人自治総合センター

講演会 いずれも午後2時より(開場1:30)11階講堂にて 入場無料/先着150名様
 「南蘋派出現のころ」 11月10日(土) 講師・成澤勝嗣氏(神戸市立博物館学芸員)
 「秋田蘭画流行せず」 11月17日(土) 講師・安村敏信氏(板橋区立美術館学芸員)

ギャラリートーク 担当学芸員による
 11月7日(水)、24日(土)、28日(水)、12月8日(土) 午後2時より
 7階展示室入口にお集まり下さい。

「実験工房」は、1950年代の日本にあって、ユニークな芸術家集団として知られていました。その理由は、たんに美術家だけでなく、作曲家や演奏家という音楽のジャンルや批評家、そして技術者（！）といったさまざまな方面から若者たちが集まり、協力して「ひとつの空間」を創造したところにあります。

とりわけ、バレエの舞台や演奏会の会場構成などは、当時のわが国にあって画期的かつ斬新なものでした。舞台に設置された立体造形や照明、バレエであればコスチューム、そしてプログラムにいたるまでが有機的に関連しあい、統一された感覚を生み出していたのです。

この集団のメンバーは、造形（美術）部門が大辻清司、北代省三、駒井哲郎、福島秀子、山口勝弘。音楽部門が秋山邦晴、佐藤慶次郎、鈴木博義、武満徹、福島和夫、湯浅譲二、園田高弘。そして照明の今井直次、エンジニアの山崎英夫。総勢14名が名を連ねています。彼らはその後のアート・シーンのさまざまな場面で活躍し、現在も新しい表現を志向しています。ただし、途中参加や留学など各々の事情により、メンバー全員でなにごとを行なった、ということは残念ながらありません。

千葉市美術館では、開館準備のころから「実験工房」に注目し、造形部門に参加した作家たちの作品をおりにふれて収集してきました。現在、この集団の活動をまるごと再現することは、その代表的な作業の多くが舞台にかかわるものであったため、不可能です。ただし、それぞれの作品どうしに共通するセンスによって、集団としての傾向や特徴はある程度今日の私たちに

実験工房の作家たち

千葉市美術館所蔵作品展



大辻清司《モダンアーティストによる新しい演出写真》1950年



北代省三《スペース・モジュレーター》
1952年（94年再制作）

伝わってきます。

実は、「実験工房」のようにメンバーのほとんどが東京生まれの東京育ち、という芸術家集団はちょっと思い出すことが難しいほど、珍しいのです。銀座や新宿といった街が、地方の若者たちにとっては映画の中のあこがれにしか過ぎなかった時代、その街を駆け抜けた若者たちによって生み出されたものが、「実験工房」のアートでした。そのためでしょうか。造形部門のメンバーの作品に共通するものは、ふるくから江戸の美的感覚とされていた「あか抜けた」とか「あっさりした」ということばがぴったりする、あるセンスです（これは、同時代の関西で活躍していた「具体美術協会」と比較すると、そのことがよくわかります）。

半世紀ちかくを経っていますが、大丈夫。今でも鮮度は落ちていません。

全国の美術館でもこの「江戸前の前衛」が名物として知られているのはここ、千葉市美術館です。

学芸員 藁科英也

千葉市美術館所蔵作品展 実験工房の作家たち
2001年11月13日(火) - 2002年1月20日(日)
休館日: 月曜日(但し1月14日(祝)は開館,翌15日休館), 12月29日 - 1月3日
12月15日(土)は設備点検のため臨時休館
入場料 一般200円 大高生150円 中小学生100円
「江戸の異国趣味」入場の方は無料でご覧頂けます。

これからの展覧会



中右コレクション

肉筆浮世絵展

- 北斎・広重から

夢二・深水まで -

2001年12月18日(火)

- 2002年1月20日(日)

歌川国貞《芸者》絹本着色軸装

神戸在住の中右瑛氏は浮世絵を中心とした肉筆画、版画の収集

や著述で知られ、そのコレクションの一部はこれまでに数々の展覧会に出品されてきました。この展覧会は、その中右コレクションの肉筆画をはじめとまとめてご紹介するもので、その多くは千葉市への寄託作品です。江戸、上方、近代の肉筆浮世絵を中心に、約100点を展示します。

戦国時代の
スーパー・エキセントリック

雪村

2002年1月26日(土)

- 3月3日(日)



《竹林七賢醉舞図》紙本淡彩軸装
パークコレクション

雪村周継は、16世紀室町時代末期に関東を活躍の場とした水墨画家。

室町の水墨画といえば禅、禅といえば水墨画 - 。この時代の多くの水墨画家と同じく彼も禅宗の僧侶でした。

しかし雪村の絵に見る技術、表現意欲は禅僧の余技というレベルを遙かに超えて現代の私たちに直接訴えてくる力を持っています。プロフェッショナルな絵描きとっていいでしょう。この展覧会は強烈な自己表現を画面にぶつけた雪村の絵を多くの人に見てもらうために企画しました。特にこれまで日本美術には馴染みが薄くても、雪村の絵から直接感応してくれる人が一人でも増えることを期待しています。

第33回千葉市民美術展覧会

2002年3月9日(土) - 3月29日(金)

毎年早春恒例の市民展も今年で33回目を迎えます。当美術館開館までは千葉県立美術館で開催されていましたが、開場を移して7回目の開催となります。日本画、洋画、書、彫刻、写真、工芸、グラフィックデザインの7部門それぞれの会員の作品、また公募による市民の力作が展示室の壁一杯に展示されます。市内の美術愛好家のための祭典。応募要項はあって公表されます。

主催:千葉市美術協会/千葉市/千葉市教育委員会/千葉市美術館/千葉市文化連盟

展覧会の日程や名称は変更される場合があります。また、入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは下記または美術館までお問い合わせ下さい。

休館日 毎週月曜(祝日の場合はその翌日) 年末年始 展示替期間
開館時間 午前10:00 - 午後18:00 毎週金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)
お問い合わせは NTTハローダイヤル 043 - 227 - 8600
URL <http://www.city.chiba.jp/art>
e-mail museum@city.chiba.jp



村上友晴 《ピエタ》

1992 - 3年
鉛筆・アクリル絵具、紙 12枚

8世紀ビザンティンのキリスト教で聖像などを描いて礼拝の対象とすることを禁じる偶像破壊の運動がおこった。仏教にも本来

同じような考え方があり、イスラム教では今なお偶像崇拜は厳格に禁制されている。聖像は教条主義の材料とされやすいのだ。しかしそれでも即物的な礼拝の対象を欲する民衆的欲求は抑えきれず、近代に至るまで視覚芸術の多くは文字文化に不慣れた民衆のための信仰、布教の道具として宗教と関係づきながら発達している。では宗教がその意味合いを変え文盲率も飛躍的に低下した近代社会、宗教美術の必要はなくなったか。確かに旧来の意味での宗教芸術が新たに生み出されることはなくなった。しかしかわりに新しい意味での宗教的芸術ははじまりを見せているかも知れない。彼らは特定の宗教のためではなく、敬虔な体験を空間に再現しようとするようである。

学芸員 半田滋男

展示室で考える

美術館はなぜ暗い

展示について皆様から頂くご意見や苦情は私たちにとっても貴重なものです。そんな中から皆さんに共通するご意見についてこの誌上でも時には一緒に考えていきましょう。まずこの号では展示室の暗さについて。一体美術館の展示室というのはなぜあんなに暗いのか。「作品保護のため」と書いてあるが、保護とは何のことか、大体見えなければ何にもならないではないか、というのが大方のご意見。まったく仰る通りです。部屋の隅々まで蛍光灯で明るく照らされた生活に慣れた我々には展示室はかなり暗く感じられるものです。そこでその作品保護というその考え方の基準を明らかにしましょう。

総ての光はエネルギーを含み、エネルギーは作品を着実に破壊します。つまり紙は黄色く変色、繊維は朽ち、絵具は退色して最終的には殆ど何も見えなくなってしまうのです。皆さんも壁に貼ったポスターやカレンダーに日光があたり、ほんの1-2週間で変色してしまったという経験がないでしょうか。染料系の色彩を用いた版画や水彩画は、印刷物のインクよりはるかに早く退色してゆきます。もちろんあらゆる作品は鑑賞することが目的、よく見えなくては意味がありません。本当は思う存分明るくして見やすく展示したいのは美術館側も同様です。ただその鑑賞という目的を自分たちだけが楽しめればよいとするのもあまりに自己中心的でしょう。というのは私たちが江戸の浮世絵版画を美しい状態で楽しむことが出来たなら、それは過去の世代がその作品を惹き、極力光にさらすのを避けて大切に保存してきたからなのです。私たちが同じように、これからの世代の利益を考えに入れてもいいのではないのでしょうか。鑑賞と保存、互いに矛盾する二つの立脚点から導かれた妥協点は、一般に脆弱な紙の作品(版画や水彩画)は80 - 100 lux、油彩画は堅牢なら200 lux以下の照度という基準です。千葉県美術館も収蔵作品にはその基準を採用しています。版画は50 luxというところも多いので、それでもやや見易い方でしょうか。また企画展などで他所から拝借した作品は先方の基準に従います。この基準でも特に展示ケース中の作品は若干暗く感じるでしょうが、人間の目はある程度暗さに順応するものです。明るい戸外から入って来たばかりの時には暗くて次第によく見えるようになってくるということです。そこで室内全体は暗めに設定し、作品自体が視覚的に明るく感じられるようにします。

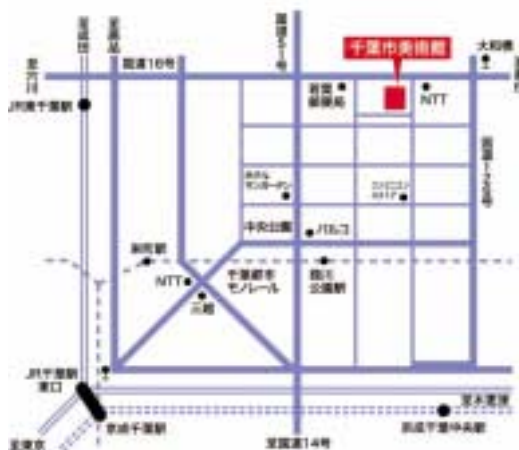
もちろん頑丈な素材による現代の作品では、自然光まで取り入れて潤沢な光量で鑑賞して頂くことが出来ます。それでもある作品が「ちょっと暗いのではないかと」思われたら、その作品は特にダメージに弱い「絶滅危惧」作品だと考えていただいて間違えないでしょう。そんなとき、皆さんの小さなお子さんやお孫さんが大人になって、またその作品を同じ鮮やかな色彩で楽しめるよきのことを考えてあげて下さい。

千葉県美術館

ハローダイヤル：043-227-8600

ホームページ：http://www.city.chiba.jp/art

- JR千葉駅東口より
徒歩約15分
バスのりばより成成バス「大和橋」下車徒歩2分
千葉県モノレール銀行前行「陸川公園」下車徒歩5分
- 京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



千葉県美術館
Chiba City Museum of Art

【編集・発行】 千葉県美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2001年11月9日

【制作・印刷】 株式会社 プリントックメディア